

ヶ国に名を連ねている。この五ヶ国がとった処置をヴァチカンが諸手を挙げて支持した。

「進歩的イスラム教徒」を自認している合衆国在住の学者たちやリントン・トンを拠点としているネットワーク「アル・ファアティハ」など、数多くのイスラム教徒の集団は、同性愛にたいするイスラム教徒の感情的な傾向を改めようとするキャンペーンを世界のいたるところで展開している。

沙漠という気候条件のなかではもともと不適切な色であり、その故にこそ男たちが着込んでいるのは白づくめであるにもかかわらず、イスラム法はそれをけつして変えようとはしないのだ。

パキスタンとナイジェリアでは、強姦の被害にあった女たちに姦淫の罪による有罪を宣告した判決が数多く報告されているばかりか、そのうちのいくつかは、石打ちの刑による死罪を言い渡している。たとえその刑が現実には執行されていないとしても、法廷は、あくまでもそうしたスタンスを崩そうとはしない。アフガニスタンの政権の座につき、パキスタンの北部のいくつかの州を支配していたタリバンをはじめとする原理主義集団は、女の子供たちには初等教育すら拒んでいる。ほとんどのイスラム国家では、女たちの識字率が他の国よりもはるかに低く、その健康管理のレベルは予測値を下回っており、その結果として、周産期と幼児期の死亡率が高い。これは統計が示している明白な事実である。

イスラム社会においては、もっともひ弱な女たちをとり囲んでいる現実が冷酷であり、伝統主義、保守主義、貧困が蔓延^{はびこ}っている地域に住んでいる女たちについてはとりわけそうした事情が当てはまる。だが、イスラムのこうした現状に抗議し、個人的、社会的権限を獲得しようとする向上心を表明している女たちの運動も、いたるところで生まれている。また、イスラムが女性解放の一つの手段たりうる

考え、イスラムの組織と教義によって貧困に喘いでいるひ弱な同胞姉妹に権限を与えようとしている女たちもいる。その一方では、保守的で蒙昧な原理主義者たちがイスラム法に抱いているヴィジョンとそのヴィジョンを実現しようとする過激な政治運動を支持している女たちもいる。イスラムの女たちを、我と我が身をどうすることもできない犠牲者だと見做すのは誤りである。それは、狂信的で排外主義的な男たちが女たちに抱いている観念と少しも違わないからだ。女たちをとり囲んでいる条件は、それぞれのイスラム国家とその社会によって、また、一つの社会のなかでもその階層や地域によって異なっているとはいえ、イスラム社会の過度の族長制は、いたるところで民主主義^{デモクラシー}の普及を妨げている。

民主主義^{デモクラシー}

イスラムは、民主主義と相容れない固有の価値など、なに一つとして持っているわけではない。民主主義は、あるいは、西欧の、また、非西欧のいかなる観念といえども、それが絶対的な真理を主張しないかぎり、あるいは、イスラムの根本的な教義を蹂躪^{ヒキマシ}しないかぎり、イスラムと抵触することはない。ただし、民主主義が反宗教的^{アンリジギヤス}人道主義と結合したり、唯一の真実を標榜したり、世俗主義がそれを、認識論、つまり、人々にとって導きの糸となる根本的な哲学と解釈したとすると、それは、イスラム信仰と抵触する。観念論^{イデオロギイ}的な主張や意匠をもたない、代議制政府の一つのメカニズムとしての民主主義は、イスラムから反論を駆り立てる要素をなにか一つとしてもってはいない。事実、説明義務や民意を確認する協議^{シムラフ}の義務といったイスラムの世界観の多くの概念は、イスラム社会に民主主義の基礎を据える手段として用いることができるばかりか、複雑に入り組んだ現代社会を機能させようとするれば、民主主義的